

修士論文（要旨）

2019年1月

介護福祉士養成大学卒業者の介護福祉士としてのキャリア形成

指導 杉澤 秀博 教授

老年学研究科

老年学専攻

215J6001

青木 宏昌

Master's Thesis(Abstract)
January 2019

Career Formation of Care Workers Graduated from Care Worker Training Universities

Hiromasa Aoki

215J6001

Master's Program in Gerontology

Graduate School of Gerontology

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Hidehiro Sugisawa

目次

第1章：はじめに	1
1.1 問題関心	1
1.2 先行研究と課題	4
1.3 研究目的	4
第2章：調査方法	5
2.1 調査対象	5
2.2 分析方法	5
2.3 倫理上の配慮	5
第3章：結果	6
3.1 分析対象者の属性	6
3.2 概念図とストーリーライン	6
3.3 カテゴリー・概念の詳細	8
第4章：考察	10
4.1 入職時点での優遇のみでは介護職としてのキャリア継続には限界	10
4.2 大卒者に期待される期待と役割の遂行	11
4.3 現状には満足しない姿勢	12
4.4 専門的知識の活用と利用者、家族との関わりから生まれるやりがい	13
4.5 本研究の限界	14
第5章：終章	14
謝辞	15

文献
資料

第1章 はじめに

1. 問題関心

大学で介護福祉士養成教育を学ぶことは介護福祉士にとって必要な要素を4年間かけて徹底的に学べる場であり、介護福祉士の資質の向上をさせるには、大学での介護福祉士養成教育が必要ということになる。では、実際、介護福祉の現場において、大学で介護福祉士の養成教育を受けた人が、介護福祉士として期待されたように活躍できているのか。

2. 先行研究と課題

大学で介護福祉士の養成教育を受けた人の場合、介護福祉士としての就職がキャリア形成というよりも、介護福祉士を一つのステップとして社会福祉士や介護支援専門員などの相談支援業務に移行していくことが示唆されている。その理由の一つとして、介護福祉士養成大学を卒業した介護福祉士が、介護福祉士としてキャリア形成していくためのプロセスが明らかになっておらず、それによって介護福祉士養成大学を卒業した介護福祉士のキャリア形成のモデルがないことが原因していると思われる。

3. 研究目的

本研究では、介護福祉士養成大学を卒業し、介護福祉士として勤務している職員を対象に、介護福祉士としてのキャリア形成のプロセスを明らかにする。介護福祉士の養成課程は大学以外にも存在するが、大学の特徴としては介護福祉士に加えて社会福祉士養成のための科目そして一般教養の科目も合わせ習得していることにある。そのため、介護福祉士養成大学卒業者の中で介護福祉士として仕事をしている人を対象とすることで、介護福祉士のキャリア形成にとって社会福祉士の養成科目、一般教養の科目を習得することの意義を明確にすることができると考えた。

本研究における「大卒介護福祉士」とは、介護福祉士養成大学を卒業し、介護福祉士養成カリキュラム及び社会福祉士養成カリキュラムを履修している介護福祉士のことを示す。

第2章 調査方法

1. 調査対象

研究対象は、介護福祉士養成大学を卒業し、介護老人福祉施設または介護老人保健施設に5年以上同じ職場で介護福祉士として勤務した経歴をもつ人10名であった。介護福祉士として5年以上勤務した人を研究対象とした理由は、2015年の介護労働実態調査では、介護職員の平均勤続年数が4.6年で、介護福祉士としてのキャリアが平均以上であるからであった。対象者は、執筆者の個人的なつながりによって抽出した。

2. 分析方法

インタビューガイドを用いた半構造化面接を行なった。インタビュー項目は以下の通りであった。(1)介護福祉士として仕事内容とやりがい、(2)相談支援業務の資格の活用、(3)介護福祉士の資格のみの職員と比べた場合のスキルの差、(4)介護福祉士としてのスキル

アップの方法、(5)介護福祉士をやめようと思った経験と理由、継続している理由、(6)対象者の基本属性。調査時期は2016年10月17日～11月30日であった。調査の所要時間は平均40分であった。

インタビュー内容を逐語録として起こし、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)⁽²³⁾⁽²⁴⁾を用いて分析を行った。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた理由は、介護福祉士としてのキャリア形成には、様々な人との関わりがあり、その関わりはプロセス的な事象であることから、この分析方法が適合的であると判断したからである。分析テーマは、「4年制大学を卒業した介護福祉士が介護福祉職のキャリアを継続する要因」とし、分析焦点者は「4年制大学を卒業し、5年以上介護福祉士として勤務している者」とした。

3. 倫理上の配慮

調査対象者には、施設の管理者を通じて、研究の目的、方法、ICレコーダーによるインタビューの録音、倫理的な事項について記載した協力依頼書を渡し、調査の事前承諾を得た。対象者へのインタビューの際は、協力依頼書に記載された事項を改めて口頭で説明し、書面で同意を得た。桜美林大学研究倫理委員会より承認を得た。承認番号は16029であった。

第3章 結果

施設への就職は、《優遇面を意識した本意ではない就職》であった。すなわち、[給与面での優遇される][学歴が職位のアップに繋がる][介護職を志向しての進学・就職ではない]といった理由からの就職であった。就職して間もない頃は、社会福祉士の仕事に職種を替えることを考えていた人もいた。就職後の施設における処遇は、大学卒業という学歴から、将来の幹部候補生として扱われ、対象者自身それに応えるように、《大卒のキャリアに期待される役割とその実現のための取組み》を行った。具体的には、<俯瞰的に介護を観る>こと、さらに<介護職員のリーダー的存在>になるように努力することであった。このような役割を担う過程で、介護職を継続する意欲が醸成された。しかし、以下のような要因もそれを後押しするように作用していた。具体的には、《介護に対する意識が高い》《大学で習得した専門的知識が役立つ》《利用者・家族からの感謝》であった。以上のように、福祉系大学出身者の間で介護職を継続する意欲が醸成される要因には、幹部候補生として施設で処遇されることを受け止め、その条件を満たすように努力することに加えて、《介護に対する意識が高い》《大学で習得した専門的知識が貢献》というように福祉系大学で習得した技術と態度もそれに貢献していることが明らかとなった。

第4章 考察

1. 入職時点での優遇のみでは介護職としてのキャリア継続には限界

本研究では、大卒介護福祉士が介護職を選択したのは、積極的に希望してではなく、大卒という学歴による《優遇面を意識した本意ではない就職》という理由であることが明らかにされた。介護職に就いている人では待遇面での優遇が職場定着の主な理由ではあるが、

大卒介護福祉士の場合には介護職としてのキャリア開始に貢献しており、一般の介護職とは異なる理由で介護職に就いていることが示唆されている。

2. 大卒者に期待される期待と役割の遂行

大学卒業という学歴から待遇面で優遇されると同時に、通常の介護職以外の業務を期待され、またその期待に応えようとする《大卒のキャリアに期待される役割とその実現のための取組み》が介護職としてのキャリア継続に貢献していることが示唆された。その内容は、〈俯瞰的に介護を見る〉と〈介護職員のリーダー的存在〉であった。本研究で明らかにされた〈俯瞰的に介護を見る〉は、大卒介護福祉士がチームケアの担い手として広い視点から介護を取り組むことを期待され、また実践していること、そのことが介護職としてのキャリア継続に関係していることを示唆している。本研究では〈介護職員のリーダー的存在〉という点も介護職としてのキャリア継続に役立っていた。大卒介護福祉士に期待される職務、すなわち介護職員の中におけるリーダーとしての役割を遂行することを通じて、介護職へのアイデンティティが強化され、そのことがキャリア継続に貢献していると思われる。

3. 現状には満足しない姿勢

本研究では、総合力が介護職としてのキャリア継続の中でどのように生かされるかという点で新しい知見を提供している。すなわち、現状に満足するのではなく、総合力を基盤により質の高い介護を目指して取り組むという《介護に対する意識が高い》という姿勢が介護のキャリア継続に重要であることを示唆している。本研究の対象者が介護職への入職の動機として社会的使命や生きがいを指摘していなかったという結果は、福祉系大学での介護福祉養成教育の中で《介護に対する意識が高い》ということが直接的に養成されるのではなく、大学教育の中で習得した介護に関する専門的知識の大切さが介護職に従事し経験を積み重ねることで自覚され、そのことが介護職の継続につながったということを示唆している。

4. 専門的知識の活用と利用者、家族との関わりから生まれるやりがい

大学における介護福祉士養成教育は、介護職の現状に対する批判的な目を養うことにそれほど貢献していないかもしれないが、介護職キャリアの継続を後押ししている可能性が示唆されている。それは、[対人援助の基礎的な理解が役立った][事務的な処理が速い][介護の専門知識が豊富]というように、《大学で習得した専門的知識が貢献》というものであった。

[対人援助の基礎的な理解が役立った]については、社会福祉士養成カリキュラムでは「相談援助の基盤と専門職」や「相談援助の理論と方法」といったソーシャルワークに関する科目を履修することが必須となっている。介護福祉士養成カリキュラムにおいても「コミュニケーション技術」の科目の中でソーシャルワークに関する知識を一部履修することが必須となっている。本研究では、そのことが実務において役立つことも明らかとなった。[事務的な処理が速い]については、パソコン技術などは大学だけでなく専門学校や短期大学でも科目に位置付けられているため、その学習機会に大きな違いがないと思われるが、大学

のゼミでプレゼンテーションなどを行うことにより、パソコンスキルや企画の立案などでその実践的な活用能力が培われ、そのことが施設での実践に役立っているのではないかと思われる。

[介護の専門知識が豊富]については、大学における養成課程の設立主旨が専門学校と根本的に異なることが介護の専門的な知識の修得に生きているものと考えられる。専門学校と大学とでは介護福祉士資格取得に必要な指定カリキュラムに相違はないが、大学では指定カリキュラムを履修した上で、さらに自身が興味・関心を抱いた課題を卒業研究として掘り下げることができる。この卒業研究において、机上で学んだ専門的な知識を動員し、課題解明にあたることで、知識の活用法を具体的に習得できるのではないかと思われる。さらに、<利用者・家族からの感謝>を受けることでやりがいを感じ、介護職キャリアを継ぎ続する要因となっていることが明らかとなった。本研究での《利用者・家族からの感謝》は、介護職一般だけでなく、大卒介護福祉士にとっても介護職キャリアの継続に大きな意味をもつことが示唆された。

文献

- (1) 内閣府：平成 30 年版 高齢社会白書.
- (2) 公益財団法人 社会福祉振興・試験センター：
(<http://www.sssc.or.jp/touroku/tourokusya.html> 2018.11.30 アクセス)
- (3) 介護労働安定センター：平成 29 年度 介護労働実態調査結果について.
- (4) 厚生労働省：今後の介護人材養成のあり方について 報告書(2013).
- (5) 厚生労働省：介護福祉士試験のあり方等介護福祉士の質の向上に関する検討会(2003).
- (6) 厚生労働省 社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会：介護人材に求められる機能の明確化とキャリアパスの実現に向けて介護福祉士制度及び社会福祉士制度の在り方に関する意見(2017).
- (7) 日本介護福祉士会：認定介護福祉士(仮称)の在り方に関する検討会(2014).
- (8) 公益社団法人 日本介護福祉士養成施設協会：
(<http://kaiyokyo.net/school/index.html> 2018.11.12 アクセス)
- (9) 介護福祉士養成大学連絡協議会：
(<http://www.kaigo-university.com/wp/> 2018.11.30 アクセス)
- (10) 吉田弘美, 佐藤直由：4 年制課程における介護福祉士養成に関する一考察-学生の意識調査より-. 東北文化学園大学紀要, 1:97-107(2002).
- (11) 吉川孝順「シルバー新報」(2008).
- (12) 介護福祉士養成大学連絡協議会：
(http://www.kaigo-university.com/wp/?page_id=2 2018.11.30 アクセス)
- (13) 厚生労働省：介護福祉士のあり方及びその養成プロセスの見直し等に関する検討会 報告書(2006).
- (14) 丸山晃, 宮内寿彦, 本名靖：4 年制大学における介護福祉士養成に関する基礎調査報告. 介護福祉士養成大学連絡協議会：1-12(2007).
- (15) 井上千津子：4 年制大学における介護福祉教育の社会的意義. 京都女子大学生活福祉学科紀要, 4：1-6(2008).
- (16) 佐藤富士子：大学において介護福祉士を養成することの意義とは」『月間福祉, 91(7)：39-41(2008).
- (17) 介護福祉士養成大学連絡協議会：四年制大学における介護福祉士養成教育について 第一報(2014).
- (18) 佐々木宰：四年制大学における介護福祉士基礎教育が卒後の実践にもたらす効果と課題. 大妻女子大学人間関係学部紀要, 12：45-59(2010).
- (19) 鈴木真智子, 大山早紀子, 大島千帆, 古屋龍太, 贅川 信幸, 添田雅宏, 大島巖: 四年制大学介護福祉士養成課程卒業者のキャリア形成の現状と課題-社大卒業者のキャリア形成と大学の役割に関する全数調査結果から-. 日本社会事業大学研究紀要, 61：97-109(2015).

- (20)北口照美,寺本恵子,森田婦美子,横井光治:介護福祉士の資質向上をめざして-介護福祉士の現状と教育内容を本学卒業生のアンケートにみる-.奈良佐保短期大学紀要, 13 : 19-25 (2005).
- (21)多田鈴子,瀬志保,長崎幸恵:介護福祉士養成校出身者の実態調査と課題検証-新しい介護福祉士養成校の役割-.大阪城南女子短期大学研究紀要, 49 : 193-211 (2015).
- (22)浜崎眞美,庵木清子,古川恵子:介護福祉士養成課程の卒後教育と教育課程について-追跡調査を通じて-.鹿児島女子短期大学紀要, 50 : 89-99 (2015).
- (23)木下康人:グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究の誘い.弘文堂(2003).
- (24)木下康人:ライブ講義 M - GTA 実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて.弘文堂 (2007).
- (25)森本寛訓,吉武亜紀,橋本勇人:介護福祉士の職場定着促進要因に関する予備研究.川崎医療福祉学会誌, 20 (2) : 495-502 (2011).
- (26)澤田有紀子:高齢者福祉施設男性ケアワーカーのキャリア形成と影響要因に関する質的調査.人間健康学研究, 7・8 合併号 : 27-35 (2014).
- (27)澤田信子:介護関係人材に求められる資質と能力-国民の信頼に応える介護-.産業教育, 47 (4) : 8-11 (1997).
- (28)本名靖:上級介護福祉士構想-4年制大学上級介護福祉士の役割と課題-.介護福祉教育, 21 (1) : 78-86 (2016).
- (29)宮上多加子:高齢者施設に勤務する社会福祉系大学卒介護職員のキャリア意識.高知女子大学紀要, 60 : 43-52 (2010).
- (30)佐藤みゆき,家村昭,長谷川武史,濱谷紀子:福祉系大学生の進路として高齢者福祉施設のニーズ・意識研究-道北・道央の特養へのインタビュー調査から-.名寄市立大学道北地域研究所, 31 : 63-72 (2013).
- (31)村上留美,森澤桂,高見スマ子,齊藤美智子:教科『卒業研究』の展望-学生アンケートからの課題-.順正短期大学研究紀要, 38 : 67-73 (2009).
- (32)小野内智子,壬生尚美:特別養護老人ホームにおける介護職員のやりがいに関する研究.大妻女子大学人間関係学部紀要, 16 : 129-136 (2014).
- (33)厚生労働省:「介護人材の処遇改善について」(2018).